

日蓮大聖人御書全集

うぶゆそうじょうじ

産湯相承事

新版  
2229  
S  
2231

うぶゆそうじょうじ

# 産湯相承事

にっこり  
しる  
日興これを記す。

はじめ　ぜしよう　じつみよう　れんちよう　もう　たてまつ

おんなの　おんなの　おんこと　ひも　うめぎくによ　わらわめ  
御名乗りのこと。始めは是生、実名は蓮長と申し奉る。

のち　にちれん　おんこと　おんこと　おんこと　おんこと　おんこと  
御名乗りのこと。始めは是生、実名は蓮長と申し奉る。

おんな　たいらのはたけやまどの　いちるい　おわ　うんぬん　ほうごう  
後には日蓮と御名乗りある御事は、悲母・梅菊女・童女の

おんものかた　おわ　われ　ふしき  
御名なり。平畠山殿の一類にて御座します云々、法号・

みょうれんぜんに　おんものかた　おわ　われ　ふしき  
妙蓮禪尼の御物語り御座しますことには、我に不思議の

ごむそう　せいちようじ　つやもう　とき　なんじ　こころざし　しん  
御夢想あり。清澄寺に通夜申したりし時、「汝が志、真

しんみよう　いちえんぶだいだいいち　たから　あた　おも  
に神妙なり。一閻浮提第一の宝を与えると思ふなり。

とうじよう　かたうみ　みくにのたゆう　もの　おとこ　さだ  
東条の片海に三国太夫という者あり。これを夫と定めよ」

うんぬん とし はるさん がつにじゅうよつか よ  
云々。その歳の春三月二十四日の夜なり。正かに今も覚え侍  
るなり。

われ ふぼ おく たてまつ いご せんかた たわれめ  
我、父母に後れ 奉つて已後、詮方なく遊女のごとくな  
とき おんみ ちち とつ い れいむ い  
りし時、御身の父に嫁げり。ある夜の靈夢に曰わく、叡山の  
いただき こし にちりん い おうみ こすい よ  
頂に腰をかけて、近江の湖水をもつて手を洗つて、富士の  
やま のち がっすいとど ゆめものがたり もう はべ おも う ふじ  
山より日輪の出でたもうを懐き 奉ると思つて打ち驚い  
ふしき ごむそう こうむ ちち たゆう われ  
て後、月水留ると夢物語を申し侍れば、父の太夫、「我も  
不思議なる御夢想を蒙るなり。虚空藏菩薩、貌吉き児を  
おんかた た たも しようじん わ  
御肩に立て給う。『この少人は、我がためには上行菩提  
じょうぎょうぼだい

さつた

ひ

もと  
ひと

しょうざいまかさつた

薩埵なり。日の下の人のためには生財摩訶薩埵なり。また

いつきいうじょう  
一切有情のためには、ゆ すえ さんぜじょうごう

だいどうし

三世常恒の大導師なり。こ

なんじ  
あた

かた

宣

み  
のち

おことかいにん  
よし

き

れを汝に与えん』とのたもうと見て後、御事懷妊の由を聞

かた

おこと  
しょうにん

く」と語りあいたりき。さてこそ御事は聖人なれ。

よ ゆめ  
ふじさん いただき のぼ

じっぽう

また產生まるべき夜の夢に、富士山の頂に登つて十方

み

あき

たなごころ  
うち

み

を見るに、明らかなること掌の内を見るがごとし。三世

めいはく

ぼんてん  
たいしゃく

しだいてんのうとう  
しょてん

さんぜ

明白なり。梵天・帝釈・四大天王等の諸天、ことごとく來下

ほんじじゅうほうしんによらい

すいじやく  
じょうぎょうばさつ

おんみ

らいげ

して、「本地自受用報身如來の垂迹・上行菩薩の御身を

ぼんぶじ

けんげ  
たも

ごたんじよう  
ただいま

たま

むねつち  
しゅ

凡夫地に謙下し給う。御誕生は唯今なり。無熱池の主・

あなばだつたりゅうおう はちくどくすい まさ く きた

まさ

く

まさ

阿那婆達多龍王、八功德水を應に汲み来るべきなり。當に  
産湯に浴し奉るべし」と諸天に告げたまえり。よつて、  
龍神王、即時に青蓮華を一本荷い来れり。その蓮より清水  
を出だして、御身を浴し進らせ侍りけり。その余れる水を  
ば四天下に灑ぐに、その潤いを受くる人畜・草木・國土世間、  
ことごとく金色の光明を放ち、四方の草木、花発き、菓成  
る。

男女座を並べて有れども煩惱無く、淤泥の中より出ずれ  
ども塵泥に染まず。譬えば、蓮華の泥より出でて泥に染ま  
じんてい そ たと れんげ どろ い そ

なんによざ

なら

あ

ほんのうな

おでい

なか

い

そ

ざるがご」とし。人天・竜畜、共に白き蓮を各手に捧げて、日に向かつて「今此三界皆是我有 其中衆生悉是吾子 唯我一人能為救護」と唱え奉ると見て驚けば、則ち聖人出生したまえり。「毎自作是念 以何令衆生得入無上道 速成就仏身」と苦我滯き給う。

我少し寐みしようなりし時、梵帝等の諸天、一同音に唱えて言わく「善哉、善哉。善日童子、末法教主釈迦仏」三度唱えて作礼而去し給うと寤に見聞きしなりと、たしかに語り給いしを聞こしめし、「さては、某は日蓮なり」と

のたまいしなり。

聖人重ねて曰う様は、日蓮が弟子檀那等、悲母の物語  
と思うべからず。即ち金言なり。その故は、予が修行は兼

ねて母の靈夢にありけり。日蓮は富士山自然の名号なり。

富士は郡名なり。実名をば大日蓮華山と云うなり。我、

中道を修行する故に、かくのごとく国をば日本と云い、神  
をば日神と申し、仏の童名をば日種太子と申し、予が  
童名をば善日、仮名は是生、実名は即ち日蓮なり。

久遠下種の南無妙法蓮華経の守護神は、我が國に天下り

はじ

くに

いざも  
いざも

ひ  
ひ

みさき  
みさき

ところ  
ところ

始めし国は出雲なり。出雲に日の御崎といふ所あり。

天照太神始めて天下り給う故に日の御崎と申すなり。

我が釈尊、法華経を説き顕し給いしより已來、十羅刹女

と号す。十羅刹と天照太神と、釈尊と日蓮とは、一体の

異名、本地・垂迹の利益広大なり。日神と月神とを合して

文字を訓ずれば十なり。十羅刹と申すは、諸神を一体に束ね

合わせたる深義なり。日蓮の日は即ち日神、昼なり。蓮は

即ち月神、夜なり。月は水を縁とす。蓮は水より生ずる

故なり。また是生とは、日の下の人を生むと書けり。

ゆえ

ぜしよう

ひ

もと

ひと

う

か

にちれん

てんじょうてんげ

いつさいしゅじょう

しゅくん

ふぼ

ししよう

日蓮は天上天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠な

いまくおんげしゅじゅりょうほん

い

こんしきんがい

かいぜがう

り。今、久遠下種の寿量品に云わく「今此三界皆是我有

しゅくん

ぎ

ごちゅうしゅじょう

しつぜがし

ふぼ

ぎ

く。主君の義なり。其中衆生悉是吾子「父母の義なり」。

にこんしそよたしょげんなん

い

そもく

ゆいがいちん

のう

いくご

而今此処

多諸患難

「國土・草木」。

唯我一人

能為救護

しょう しょう い

さんぜじょうごう

にちれん

こんしきんがい

「師匠の義なり」と云えり。三世常恒に日蓮は今此三界の

主なり。

日蓮は「大恩

いけうじ

以希有事

れんみんきょうけ

りやくがとう

憐愍教化

利得我等

無量億劫誰能報者なるべし。

にちれん げんざい

でし

みらい

でしどう

なか

にち

もし日蓮が現在の弟子ならびに未來の弟子等の中に日

もじ

うえ

じ

お

じねん

ほうばち

こうむ

文字を名乗りの上の字に置かずんば、自然の法罰を蒙ると

し 知るべし。予が一期の功德は日文字に留め置くと御説法ありしまま、日興謹んでこれを記し奉る。

しょうにんのたま 聖人言わく「この相承は日蓮嫡々一人の口決、唯授  
いちにん ひでん そうじょう にちれんちやくちやくいにん くけつ ゆいじゅ  
一人の秘伝なり。神妙、神妙」とのたまいて留め畢わん  
いんみょう しんみょう とど お ごせつぽう  
ぬ。